

## 事例紹介

岩手県立大学 学生支援本部 特任准教授 高瀬 和 実

皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました岩手県立大学の高瀬と申します。本日はこのような機会を頂戴しまして、私どもの大学のキャリア教育全般の取り組みについてご説明をさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

最初に大学のご紹介をさせていただきたいと思います。私がおります滝沢キャンパスという所には、いわゆる四大学部と盛岡短期大学部の二つの学部がございます。先行して短大部がありましたけれども、それを併合する形で1998年に岩手県立大学が開学をしております。今年で開学18年目になります。新幹線の盛岡駅からバスでも電車でも30分~40分ぐらいの距離の所にあります滝沢市のキャンパスのほかに、宮古市にも宮古短期大学部のキャンパスがございます。こちらは県の中心部からさらに100キロほど離れておりますので、沿岸都市ということで移動にも2時間ぐらいかかるような所になります。それ以外に盛岡駅の裏、西口のほうになりますけれども、アイーナという所にサテライトキャンパスもありますので、合計三つのキャンパスを有する大学になります。学生数は全体で合わせて2500名規模ですので、大きくもなければそれほど小さくもない地方の公立大学ということでご理解をいただければと思います。先ほど来のお話をずっと伺ってまいりまして、私を含めて社会が学生に期待するものというのは、どんどん多大になってきておるなど、責任は重大だなどあらためて感じております。そのような中で本学のキャリア教育がどんなところで四苦八苦しているのかというようなことを、まずはその全体像をご説明させていただきまして、後半のところでは先ほどから一つのテーマとしてあがっておりますインターンシップの内容を少し詳しくお話をできればと思っております。

本学のキャリア教育の全体像につきましては、簡単に1枚の表を用意してみました。これで全体像のご説明になるので、少し補足をさせていただければと思っております。まず私がおります学生支援本部ならびに高等教育推進センターというのは、滝沢キャンパスの四大学部ならびに盛岡短期大学部全体を見ている部署になります。学生支援本部はいわゆるキャリアセンターを企画している部署ですので、就職支援なども同じようにやっておるところです。左側の表の所に全学ということで、そこで行っているキャリア形成の施策について並べております。一番左側にあります『Eプロジェクト』は、学生が自らテーマを選んで活動したいものを見つけ、メンバーを募り、学内学外問わず協力者を集めて取り組みをするというプロジェクトの支援になっております。こちらは1件について30万の予算上限で支援をしているというのが一つの目玉になっております。昨今も4月から学生の募集を始めまして、書類審査とプレゼンテーションの審査を行い、この上期5件のプロジェクトを採択して活動をスタートさせたというような状況になっております。その隣にあります『インターンシップ』につきましては、私どものインターンシップ、1年生から4年生まで学年問わず課外活動の一環として取り組んでおります。こちらについては、また

後で詳しくご紹介をいたしますので、ここでの説明は割愛をいたします。その隣に選択科目ということで、学生支援本部が関わる授業科目『人間と職業』というのを置いております。私が担当でやっておりますけれども、15コマの中で8コマから9コマ、本学の卒業生含めて実際の社会で活躍されている職業人の方に来ていただいて、職業全体を俯瞰するような授業をしております。それとその隣にあります『ジョブシャドウイング』というものですけれども、これは夏季休業期間に中心に行っているインターンシップと相互補完するような形を狙って、いわゆる春休みの時期に行っている、1、2年生中心の1日間の職場体験のプログラムです。こちらは学生自ら就業することを目指すものではなく、実際に働いている方の様子をじっくり見させていただくものです。気付きを中心にしたプログラムということで実施をしております。現在本格的に始めて2年が経過したところなので、インターンシップに比べれば規模はまだまだですけれども、昨今の就職活動の開始時期の後ろ倒しに伴って、春休みの時期をどのように活用していくかという点では、今後の発展に期待をしているものになります。その隣から『総合政策学部』『ソフトウェア情報学部』『盛岡短期大学部』ということで、三つの学部を並べております。こちらの学部がある滝沢キャンパスにおいて、私がキャリア教育に関わっている三つの学部になります。平成25年度のカリキュラム改訂に伴いまして、見ていただいているような体系に現状なっております。共通して言えることが、画面で見るとピンクに見えておりますでしょうか、基本的には各学部のキャリア教育を必修の科目にしているということです。必修で、かつ学部の専門教育の中に位置付けたということです。各学部の共通課題として、いわゆるキャリア形成への興味であるとか、キャリア形成に必要な能力の涵養という点で、我々が必要だなと思う学生の中には選択科目を設けても、どうしても選択してくれない学生がいます。そうした問題意識から、私どもとしてはまず基本になる科目として全員が受講するという位置付けを行いました。また定期的に学部ごと現状の確認を行います。つまり能力がどれぐらい伸びたかの伸長確認という意味でのアセスメントを定期的を実施しております。全学共通のものと、各学部独自に行っているものと、定期的を実施をすることで、測るのが難しいと言われているキャリア教育に何らかの指針、あるいは改善の糸口を見つけようという取り組みを始めているところです。

少し学部ごとに補足をいたしますと、総合政策学部につきましては、行政と経営と環境と地域と四つのコースに3年次から分かれる、いわゆる本当に総合的な学部です。1年の後期の『キャリア・デザインⅠ』と3年の前期の『キャリア・デザインⅡ』というものが必修で置かれています。いわゆる就職支援とは完全に切り離しております、キャリア形成における興味喚起と加えて先ほどから少しテーマで出ています社会人基礎力ですとか、就業力と言われているような基本的な人間力を涵養するために、アクティブラーニング形式のグループワークで課題をたくさんこなすというような授業スタイルを取っております。平成25年度からスタートさせていますので、今の3年生がちょうどキャリア・デザインⅠを受講した上でⅡを受講した最初の学年です。まだ移行期間ということもあってかなりバ

タバタはしておりますけれども、これからあと 6 回、7 回の授業の中で、地元の南部せんべいのメーカーさんとコラボしまして、駅ビルのコーディネーションをいただきまして、新商品の開発に取り組むということを新しくやる予定になっております。また学部としてインターンシップそのものを単位化しておりますので、インターンシップが 2 年、3 年に縦に入っているのはそういった意味になります。

それとソフトウェア情報学部ですけれども、この学部については特徴あるところが一点、背景として講座制を敷いているということがあります。1 年時から研究室に配属されるということから、『基礎教養入門』と『キャリアデザイン I』と『キャリアデザイン II』の 3 つが縦の線でつながっているのは、時間割上で同じ時間帯で行って、合同で行うところは合同で行います。あるいはそれぞれの学年進行で基本的には問題解決の技法を身に付けるということで一貫してやっています。1 年生のケーススタディについて 2 年生の上級者がその課題の確認を行うというようなグループティーチング方式を今年度から取り入れたりしています。いわゆる縦のつながりを重視したような教育のやり方を始めております。その隣にあります『学の世界入門』と『プロジェクト演習 I』『プロジェクト演習 II』も全く同じでして、こちらのほうは後期科目ですので、混合のチームを最初から組み、その 1、2、3 年の混合チームの中で一つの演習課題に取り組みながら成果を出していくというような授業をやっております。

その隣の盛岡短期大学部ですけれども、こちらは短期大学ということもありまして、1 年次に集中させて前期後期で必修の授業を入れております。2 学科 3 専攻ありまして、専攻もいろいろですので他に時間が取りにくいということで、この学部については就職ガイダンスに近いような内容も授業の中では取り込んでやっているというのが現状です。

以上のような全体像のキャリア教育施策の中で私の個人的な悩みとしては、全て「キャリア」「デザイン」というタイトルが入っているので、どの学部のキャリアデザインか混同してしまうということです。これはいい意味では、名称をさておいて、各学部で必要な教育を企画実施した結果ということなのですけれども、外で見るとどこのキャリアデザインなのか非常に分かりにくく、I、II がそれぞれずれて 2、3 年生に配置されたりしておりますので、分かり難さが伴ってしまう現状の体制になっています。それともう一つ、ここの表の中でも、ソフトウェア情報学部の『インターンシップ 1』『インターンシップ 2』という科目が置いてありますけれども、これも学部でこだわっているところがございまして、2 年次のインターンシップ 1 につきましては、学部の専門とは全く関係のない業界に行くことを推奨しているインターンシップになります。ソフトウェア情報の技術がどのように必要とされるのかをまず専門知識とは切り離して体験するという意図があります。それを踏まえてインターンシップの 2 については、今度は学部の専門知識を十分に生かせるような業界に行くように、しかも大学がなるべくお膳立てをしていない競争原理が働くようなインターンシップに参加することを推奨しています。以上のようなインターンシップにつきまして本学として、文部科学省様から先ほどご説明がありましたテーマ B という事業を活

用した強化を昨年度から行っておりますので、その強化につながる流れをご説明させていただければと思います。

もともと本学のインターンシップは、私どもの大学単独のインターンシップではなく、岩手県にあります盛岡大学、岩手大学と3大学合同の連携でやっているインターンシップでした。特にコーディネート機関がない状態で連携インターンシップをやっておりました。幹事大学が事務的な取りまとめを行い、その流れに沿った形で他の2大学が共同して行うといったものです。形としては中長期のものではなくて短期間の就業体験のものが中心になっています。ここに書いてある項目は、よくご覧になれるようなインターンシップの形態かとは思いますが、そのようなコーディネート機関がない中でのインターンシップですので、非常に苦労しているのがマッチングの所です。各大学が申し込み状況を取りまとめ、それを幹事大学が集約をし、その申し込み状況に応じて全体の定員枠を大学ごとに割り振るといような事務作業を、協議をしながらやっている状況です。一定のルールに基づいてお互いさまという形でやっておりますので、その手間を抜きにすれば割とうまく回っているほうのかなと思っています。27年度インターンシップの強化につきましては、昨今出てきています就職活動時期の後ろ倒しに伴い、インターンシップのピークのタイミングと企業さまの採用活動のタイミングがぶつかることがすごく懸念されております。そのためにインターンシップ先の確保ということで、従来の、いわゆる文書による一斉のお願い、いろんな本学の関係性の深い所を中心をお願いをしているものの他に、今年初めてインターンシップの説明会というのを企業さま向けにさせていただきました。やはり肌感覚で企業さまの状況を教えていただきたいと。あとはこちらの思いを伝えさせていただきたいということで設けていたものです。ただインターンシップのためだけにお集まりくださいということで、果たして来ていただけるのかなと非常に悩ましいと思っておりました。そこで学内の合同企業説明会を今年3月にやっておりますが、その合同企業説明会のときに合わせて場所と時間を設定して、インターンシップのことをあえてというか、あらためてというか、お願いをしました。もしくは連携機関でいろんな合同企業説明会ですとか、就職に関する情報提供の機会に、我々のほうがお邪魔をして、連携機関と共同で場所と時間を設定しましてご説明をさせていただくようなことを行いました。のべで今までで5、6回は実施したでしょうか。合計で50社以上の企業さまにお会いさせていただきました。非常にご熱心にお話を聞いていただきまして、一概に就職活動が後ろ倒しになったからといって、インターンシップそのものを敬遠されるのではないのかなというように現状のところでは感じております。

その背景に本学の特徴として、23年度から就業サポーター企業というのを実はネットワーク化しております。基本的には県央、中心部の地域が多くなるのですが、それでも全県にわたって現状159社の企業さまに本学の教育への協力をお願いをさせていただけるような体制になっております。その最たるものがインターンシップということになっています。それ以外に授業への協力ということで、例えば、左側の写真は短期大学部の授業を、授業

参観よろしく企業さまに視察をいただいた様子です。この回は、短期大学部生のうちインターンシップを行った学生と行ってない学生を混合にしまして、情報共有をするというグループワークの回でした。ここでは我々教員があまりにもいろんなものをお膳立てし過ぎているということを企業さまからご批判をいただくような場面がありました。一方では教育としてどこまで手をかけるのかという部分と、一方では突き放してどう育てるかという部分のバランス感覚という点で、非常に参考になった機会でした。こちらの右側の写真は、先ほどご紹介したソフトウェア情報学部のプロジェクト演習という1年から3年合同の演習の最終の成果発表会の様子です。体育館にホワイトボードたくさん持ち込みまして、チームごとに取り組み成果のポスターを貼りだし、全員が発表するというようなセッションなのですけども、その場に企業さまに来ていただいて評価をしていただいています。評価の前提として、そのプロジェクトの課題をまず頂戴して、その課題に対する質疑応答の場を授業の中間で設けさせていただいて、その上での評価ということです。結果的には、各企業さまに工夫された副賞付きの表彰もしていただくような機会になっております。こういった教育の場にご協力をいただいているネットワークが就業サポーター企業です。

話をインターンシップに戻します。大学としては教育効果が高いと言われている中長期のインターンシップに取り組みたいと思っているのですが、23年度から取組みを本格的化している状況においてはなかなかそこまで手が伸びていないというのが現状です。広く浅くであろうと、短期間のインターンシップになるべくたくさんの学生に参加してもらいその参加の中で少しでも効果の高いインターンシップにどうしようかということで、経済産業省さんからも出ているこういった四つの項目を網羅すれば効果が高まるということをご参考にさせていただいています。それを目指したプログラムにちょとずつ近づけようとしているところです。基本的には学生が自主参加で自己完結型の学びを深める工夫をどのように行うかということでやっております。いわゆる興味喚起をどうするかという部分と、興味を持った学生がどう混乱なくインターンシップに参加できるかという部分にまず苦心をしております。この辺の詳細のところは、後ほど資料をお読みいただければと思います。参加目的の明確化という点では、インターンシップに興味を持ったときの参加目的と、最終的にわれわれがこの企業に行きなさいとマッチングしたときの、そこに行くことになった上での目的というのが、微妙に異なることもあります。そこを2段階で明確化させた上で、私どもはもとより企業さまにも学生プロフィールという形で、その目的をお伝えするようにしています。事前にそれを確認していただいた上でインターンシップを受け入れていただくことで、いわゆるお互いの認識を合わせようというプロセスです。実施中と事後の評価という点で、学生が日々振り返りを行うとか、最終的に全体の振り返りを行うことはもちろんですけれども、評価指標を学生と企業さまと現状では合わせさせていただいています。企業さんからなるべく学生をじっくり観察いただいて、いわゆる人間力、社会人基礎力をベースとするような評価項目に伴う評価をいただいています。それと同じ項目を学生にも実施後に評価させまして、学生にはその評価をフィードバックすることで自己認

識と他者認識のギャップを確認させるということをインターンシップの中で行っております。企業さまの評価が厳しくなるのかと思いきや昨年度行ったのですけれども、結果的には学生の自己評価のほうが厳しかったというのが昨年度の結果です。今年度実施してどうなるかなのですが企業さまとするとやっぱり短期間の中ではなかなか評価しづらい部分も正直あるのかもしれません。その辺の感覚もぜひお教えいただきながら、適正なインターンシップの評価、適正というのは甘いとかそういうことではなくて、学生のためになる評価がどういうものになるのかということは、今後あらためて詰めていかなければいけない課題だと昨年実施をして思っているところです。学生のアウトプットに関しまして、いわゆる日報と報告書と言われるものを学生には形式を決めて書かせています。それは企業さまのほうに昨年度から全てお戻しすることにしております。見ていただくことで、企業さまが意図して組んだプログラムが学生にどう受け取られているのかということをご理解いただけます。結果的に今年度のインターンシップのプログラムの検証であるとか、来年度以降こういったプログラムにしたらいいかということの検討の材料にさせていただくことを意図してやっております。一社一社全てお戻ししますので正直かなり手間は掛かかります。あとはそれを見ていただいてどうだったのかという反応を、実は昨年採れていませんで、そここのところをもう一度きちんと確認をしながら、今年度も基本的には継続の方向でプログラム改善につなげていきたいと考えております。全学共通の基本的には課外活動のインターンシップでやっておりますので、全体を集めて事後学習がやりにくいという一つの制約がございます。基本的には学生に日報と報告書を出させることで内省を促して、内省から気づきを促し、そこから後期の授業に入ったときにどう行動改善するかということを示唆するような形にしているのですが、それ以外は学部ごとに事後学習の強化を図る流れになっています。ここに載っているのは総合政策学部で、『総政カフェ』という少し緩やかな名前になっていますが、インターンシップに行った学生も行かない学生も合わせた情報共有の機会です。短期大学部の場合も、これは授業の一環でやはり同じように、行った学生行かない学生合同の情報共有の機会を持つような流れです。ソフトウェア情報学部も同様に学部内の事後学習の機会を設けるようなことになっています。従来よくある事後学習は、壇上で数人が成果のプレゼンテーションを行うとか、パネルディスカッションを行うというような形の事後学習が多かったのです。それだとあまりにもわずかな当事者以外は、聴衆が他人事みたいにその場にいるだけの状況が生まれやすいものですから、なるべくこういった広いグループワークが可能な教室を活用しまして、グループシェアですとか、座談会ですとか、ワールドカフェというスタイルを取り入れて、全員が当事者になるようにしています。話すこともあれば聞くこともある。聞いたことを考えて持ち寄って、それぞれの知見を生かして視野を広げさせる。スペースの問題ですとか施設の問題はあるのですが、多様性の理解ということも含めて、そういった学習機会にするように切り替えていっております。

それとインターンシップの強化で特徴あるプログラムとして、今年で3年目になろうと

しているのですが、他大学の学生とインターンシップをテーマにした学生交流大会というものを行っております。具体的には、桜の聖母短期大学と本学の盛岡、宮古の短期大学部と四大学部の4大学の参加です。合計40人規模のもので、一泊二日の合宿形式のインターンシップの学生交流大会になります。極めて限られた人数なので、いわゆる上位層の学生にどうしてもなりがちではあります。ただそこで気付いたこと、考えたことをまた各学部を持ち寄るようなことを授業の中でも取り入れようとしてやっております。今年度も実施する予定で、実は後ほどご紹介する連携の枠の中で、少し参加大学が増えていくようにできないかなと検討中です。交通費の問題等もあって、予算的に厳しいところはあるのですが、一つの特徴あるプログラムとして継続させていこうとしております。

このあたりの数字の実績の所は割愛いたしますので、後ほどご覧いただければと思います。企業さまにご協力いただくインターンシップということで企業さまのアンケートは、このような状況になっています。基本的には、やっぱり社会貢献であるとか、教育への貢献というのが主導で入っております、自社のためになったという部分が3番目4番目ぐらいになってやっとなってくるような状況でございます。このところはプログラムを見直す中で、本当に企業さまの業務改善になるとか、人材育成のプログラムとしても使えるようにしたらできるのかという部分を、今苦心をしているような状況です。

インターンシップの強化に伴って、いわゆるテーマBと言われる事業を活用して、『東北インターンシップ推進コミュニティ』というものを、テーマAのところから連携している大学からさらに抽出した大学とで行っております。これらの大学と連携機関と一緒にやっているのです。いわゆる問題意識としては本学ですと岩手県出身の学生が60パーセント、それ以外の東北で25パーセントですので、85パーセントの学生が東北地域の学生ということになります。連携する大学を合わせても同じような状況なものですから、東北地域全体でのインターンシップの量の拡大であるとか、円滑な学生の交流、活用ということができれば、インターンシップそのものの裾野が広がるのではないかという問題意識から企画しました。実際、そのためのツールとして今年度から「インターンシップ in 東北」というサイトを立ち上げて、運用を始めました。昨年度は準備期間でした。企業さまからは企業情報を登録していただき、あわせてインターンシップ情報も登録をしていただきます。学生はその情報をさまざまなキーワードで自分に合うインターンシップを探すために活用し、かつ実際の申し込みも行うというようなサイトです。資料には270件となっておりますけれども、最新の情報だともう300件を超えるインターンシップ情報をここに全てあげております。実際、まだ少し途中でもあるのですが、学生のエントリーも300件、300名を超える状況でやっておりました。現在、マッチング作業中です。ここにURLを載せておりましたし、Yahoo!のサイトでもGoogleのサイトでも、「インターンシップ」、「東北」の2文字で検索していただくと、一番に上がってくるようになってきておりますので、ぜひ一度ご覧いただければと思っております。コーディネイト機関がやっているわけではないので、基本的に各大学が運営しているインターンシップ制度をここで一元化して見られるというサ

イトです。企業さまは所属されている県のインターンシップを実施している大学の制度に加わる形で掲載をさせていただいております。最初から1個にしようが無理な力を加えておりませんので、今後大学ごとにインターンシップを実施しているような大学さまとはもっと連携を図って行って、増やしていきたいと思っておりますので、現状では東北地域ということですが、ぜひこちらのほうから情報も提供させていただきつつ、この制度をうまく使ってインターンシップ自体の参加の裾野を広げていきたいと考えております。まだまだ運用が始まったばかりでして、涼しい顔して泳いでいる水鳥のようであっても、実は水面下ではすごくバタバタしている現状です。やってみて分かったことも多々あります。今後形だけではなくてプログラムという点、教育効果という点でさらに付加していった上で強化をしていきたいと考えております。ぜひ忌憚のないご意見を多々いただければと思います。私からは、ちょっと駆け足でしたけれども、以上事例のご紹介とさせていただきます。どうもありがとうございました。